
今夜は眠れない....。

神姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今夜は眠れない…。

【コード】

N6014G

【作者名】

神姫

【あらすじ】

1話1話のシリーズにしたいと思います。あらすじは前書きで…。

神社の幽霊（前書き）

宮本ほの子と莉子に迫る、
神社の幽霊とは…？

自分の目でお確かめ…。

神社の幽霊

私は宮本ほの子^{みやもとほのこ}。普通の高校2年生。

私の住んでいる町には、幽霊が出るという心霊スポットがある。しかも、一つではない。5つも6つも、それ以上あるという噂だ。

そして、ある日、見てしまったんだ…。

今日も部活が終わり、小佐野莉子^{おさのりこ}（友達）と2人で夜の町を帰っていた。

帰り途中に、大きな木がある神社がある。

そこは、心霊スポットの一つで、夕方6時をすぎると、買い物をしにお母さんの霊が現れるという噂で、実際に目撃した人もいる。

今は7時半。もう暗くなっているが、街灯があるのでそんなに暗くはない。

莉子と、この神社の霊のことを話していた…。

そして、現れちゃった…。

噂の神社の前を通っているとき、神社の方から赤ちゃんの泣き声が聞こえるのだ。

霊かもしれない…。

私と莉子は、ゆっくりゆっくり階段を登る。

足音をたてないように歩く。

でも心臓の音は隠せない…。

ドクン… ドクン…

階段を登りおえたとき、ぴたりと鳴き声が止まった。

「え、鳴き声やんだよ……。ほの子……。」

「莉子……。まさか……。」

まさかは当たった。

肌がやけに白く、髪が長く、口が裂けているかのように見えるのは、
気のせいだろうか……。

目の前に立っている。

友達でも知り合いでも人間でもない。幽霊だ。

「ふふふ……。今日もあらわれたあ……！」

「キヤアアアアア……！」

幽霊は、口が耳までさけて、目玉が飛び出して、牙がある。
そして、大きなカマを持って追いかけてくる。

「今日もおいしそうな小娘が手にはいるよお……！」

ぐさっ……。

あ……。目の前には、血まみれになった莉子が倒れていた。

ああ、私もこのまま……。

「うあああ……。」

翌日

「ねえ、知ってた？ 3組の小佐野と宮本がね、神社で血まみれで倒れてたんだって…。」

「ええ、怖っ！！まさか、幽霊のせい？」

「まさか、通り魔だよ。」

もう噂が広がっている。

今度は、私と莉子が誰かを殺さなきゃ行けない…。

白い手と水着の謎

暑い八月の海で、私、加藤円と、彼氏の加藤登は、浮輪に乗りながら、冷たい海の中で遊んでいた。今日は、友達のカップル（坂本美代、伊勢川ひろと）とダブルデートで来ているのだ。

前日の話。

「ねええ、円。水着どうする？」

私と美代は、水着を選んでいた。

「私はね、ビキニの上にタンクトップとハーフパンツがついてるヤツにする。」

「あ、それいいねえ！じゃ、私それ買ってくる！」

私と美代は買い物済ませて、美代の家の部屋で試着してみた。

「円、似合ってるよ！」

「美代もかわいいじゃん！」

試着をおえて、私と美代はクーラーの効いた美代の部屋でくつろいでいた。

「いいわね、海。」

と入ってきたのは美代のお母さんだ。

「はい、ジュースとお菓子。」

「ありがとうございます、お母さん。」

「ありがとうございます。」

「ゆっくり、と行って、美代のお母さんは部屋を出た。」

「明日楽しみやなあ！円の彼氏ってどんな人だろう。」

「イケメンで優しいし、運動神経抜群で！美代は？」

「ん〜とね、メガネだけどイケメンでえ、頭が良いの！」

「勉強教えてもらってるんだあ〜？」

「えへへ！まあね。」

と、お互いの彼氏の話しながら、お菓子を食べた。

自慢じゃないけど、私の彼氏に加藤登はイケメンで優しくて、運動神経抜群！

でも勉強はダメだから、私が教えてあげてる。

夕方6時になったので、明日早く出られるように、美代とバイバイして帰った。

帰っている途中、登に出会った。

「おお、円。ん？その袋…。もしかして水着か！？」

「うん！水着。」

「うひょーい！」

「なっ、何考えてんの？」

「いや、おしえん。」

「ぶー、じゃあ帰るよー！」

私はほっぺを膨らまして帰った。

「登のばか！」

「円のぺたんこ！」

な、ついてきてたのかって、方向同じだ…。

「私はぺたんこじゃありません〜。」

「……ぺたんこ！」

もうむかついたので、走って帰った。

…本当は、そういうところが好きなんだけど！

その夜、私は眠れなかった。

そして今日に至るわけだ。

「円やっぱりぺたんこだな。」

「まだいうか、それ！」

今度は水遊びになった。

ちゅんっ

海の波音は聞いてて心地良い。
ところが、

ちゅんっ ああー！

音というより、声のしたほうをむいたが、何も無い。
私たち4人は、同じ方向を見ている。

ということは、この4人の中じゃない。だれか別の人だ。

「なんか不吉う。気持ち悪かったねえ。」

「なんか、聞き間違えじゃないの？」

「でも、みんな聞こえてたんでしょ？」

美代とひろとは話している。

「登、なんか怖くない??」

「円は恐がりだなあ。」

「しょうがないじゃん。」

そのあと何もなかったので、また遊び始めた。しかし、また

ぎゃああああ！

またみんなは同じ方を向く。

しかも、さっきより大きくなっている。

「ねえ、帰ろうよ…登。なんかおかしいよ。」

「…そうだな。なんか気持ちわりいしな。」

私たち4人が帰ろうとしたとき、

ぎゃあああああ!!

たすけてええええ!!

水着をよこせええええええ！！

またふりかえると、海から真っ白い手が無数に出ている。

「きゃあああああ！！」「

私と美代は叫んだが、男群は盾になってくれた。

走って帰ろうとすると、白い手が追ってくる。

手が伸びている。明らかにおかしい。

水着をよこせええええ！！

手がしゃべっている。

私と美代は、水着をとられてしまった。

「うそ、やだあ……」

「なんで水着をほしがるんだ？」

登は、自分が着ていたパーカを着せてくれた。

「ありがとう……登。」

「とりあえず、着てろ。」

登のパーカはさすがに大きい。太股も隠れる。

私の背が低いだけけど。

白い手は、私と美代の水着を持って

海の中へ消えていった。

それから、夕方になって、寒くなっても、私たち4人は海を見続けていました。

あの、白い手が水着をほしがったのは、何でなのでしょう……。

円「あれから10年かあ。」

美「だね。結局なんだったんだろう。」

登「迷宮入りの謎だな。」

ひ「謎ですね……。」

あれから、私たちは謎も解けていないまま、事件の3年後、21歳に結婚しました。

ダブル夫婦で、10年前のことを話しています。

7歳になった娘も、ああならないように願っています。

13日の金曜日

追われている。追われている。

私、美枝子は、今追われている。

車に乗っているというのに、なんとという俊足。ペットのワンちゃんに、追われている！

「つたく！あなたはバカか！」

窓から頭を乗り出し、ワンちゃんに叫ぶ。

「えさならやっただでしょー！」

「うゝわんわん！！」

これも、毎日のことであるが、

今日は13日の金曜日…。

なにか不吉なことがないと良いが…。

考え過ぎか！気にしないでおう。

だが、やっぱり不吉なことは起きてしまった…。

いつものように、車に乗つけて、会社へと向かう。

ワンちゃんは、会社で人気のある看板犬だ。

しかし、会社の上司に「犬に人気があつては、私の人気落ちる！」など意味のわからないことをいわれて怒られてしまったことがあるので、

本当はつれてきたくないのだが…。

予想はあたり、また上司に怒られてしまった。

「美枝子さん！困りますう！」

「す、すみませんすみません！」

つたく、ワンちゃんのせいで、また今日も怒られている。

いつも通りのデスクに向かうと、パソコンを開けて、資料を作成している。

ワンちゃんは、特別に受付の人に頼んで、見てもらっている。

「ふああ！終わった！」

残業で遅くなってしまった。

「美枝子さん、お疲れ！」

「あ、先輩こそお疲れ様です！」

いつも通りの挨拶を交わし、ワンちゃんの方へ向かった。

「わん！わん！」

「ごめんね、遅れちゃって。ありがとうございます。」

「いえ、良いんですよ。お疲れ様です。」

さて、帰ろうかとワンちゃんをだっこすると、ワンちゃんがいきなり、

「うーうー」

とうなりでした。

振り返るが、何も無い。

「ワンちゃん、なにかあるの？」

しかし、もううならなくなった。

「きつと、つかれたのね。」

車に乗って、家へ帰るとき、

後ろから追いかけてくるのが見えた。

ワンちゃんを忘れてきた…はずがない。

後ろを見ると、ワンちゃんは伏せている。

しかし、何だろう、この違和感…。

信号で止まって、後ろを振り返るが、

特に変わった様子はない。

信号が青になって、進み始めると、

また妙な違和感がする。

ブレーキをかけて、とまって振り返ると、

いた…。のっぺらぼうが…。

しかも、追いかけてくる…！！

「ぎゃあああああ…！！」

ワンちゃんがビククリして起きあがると、
またうーとうなり始めた。

そして、ドアの開け方を知っていたのか？

自分で鍵を開け、ドアを開け、のっぺらぼうの方へ向かう。

のっぺらぼうに飛びかかり、のっぺらぼうは倒れて、消えた…。

「え？」

私は止まって、ワンちゃんが来るのを待った。

ワンちゃんは私に近づいて、また、今度は私の後ろにつなり始めた。

…。まさか…。後ろを振り返ったら、いた。

のっぺらぼうが、顔の皮をはぎ、口が裂けていて、一つ目で、刃物
を持っていた。

なにかしゃべった。

「13日の…。金曜日。…」

と行って、刃物を振り上げた。

「ぎゃあああああああ！…！」

夢の中

真っ暗な世界に、私は何回飛び込んだのだろう。

夢の中で、迫ってくる大きくて黒い穴。

宇宙にある、ブラックホールか？

吸われるような違和感がある。

また、今日も夢の中…。

「ええ、また見たの？その夢。」

「そう…。もうこれで1週間連続…。」

「大丈夫??眠れないんでしょ?」

「そう。夜中に起きてしまうの。」

私、木岐^{ききなな}奈々は、友達の野上麗奈と

私の部屋で話していた。

毎日見る夢のせいで、私は眠れていない。

必ず夜中に起きてしまい、それからは明るい部屋で

テレビをつけているのだ。

「奈々…。気にしない方がいいんじゃない?」

「そんなこといったって、見ちゃうのは仕方ないじゃん。」

「そうだけど、きにすると、同じ夢を見ちゃうんだって。」

「でも…。」

とりあえず、私は良いから寝なよ!と、麗奈は寝かせてくれた。

「私は奈々が起きるまで居るよ。うなっていたらおこすから。」

私は、この言葉に安心し、眠りについた。

また、あの夢を見ている…。大きな穴に追いかけられる…。

たすけてー！ー！ー！！

夢の中で私はそう叫んでいる。

しかし、目が覚めた。

起こしてあげるよと、いったが、起こしてくれなかったと言っことは、
うなされていなかったのだろうか。

むくつと起きあがり、目をかく。

「麗奈ー。いるの？」

声をかけるが、返事は無い。

ベッドをおりて、トイレや風呂場へむかうが、姿はない。
ベランダの方へいくと、いた。

しかし、皮のはがれた赤い肉体があるだけ！！

「ひっ！」

私は口を押さえて、その場に座り込む。

がらがら…。

「なにしてんの？」

「へ？麗奈…。」

「ひいつ、なにその人間みたいの！」
「わからない…。」

ベランダの窓を開けてきたのは、麗奈だった。
しかし、なぜベランダに皮のはがれた肉体があるのだろうか…。

「とりあえず、警察だよね！」

「奈々！待って！」

「え、なんで？」

「しなくて良い。」

といて、麗奈はその場に座り込む。

「夢じゃなかったんだよ…。大きな穴も。真っ黒い世界も…。」

「なにいつてるの？麗奈…。」

といて、麗奈は倒れた。

びよ、病院！

しゃべっていないのに、今度はベランダから声が…。
振り返ると、あの肉体が笑っている。

「ぎゃあああああ！…！」

「何叫んでるの？」

といて入ってくる。

「きゃあ、来ないで！」

「なによ。友達の麗奈に失礼ね。」

え……………？

はっ

目が覚めた。

「大丈夫？来ないでって叫んでたよ。」

「え、じゃあ、あの肉体って…。」

「え？肉体？別の夢見たの？」

嫌な予感がして、ベランダの方へ向かった。

がらつと窓を開けて、夢であった肉体の方を向く。

…しかし、何も無い…。

麗奈の方を向いた。

「ぎゃあああああ…!!」

「何叫んでるの？」

はっ

目が覚めた。

「大丈夫？来ないでって叫んでたよ。」

さっきも、同じパターンがあったような…。

ベランダに行くが、何も無い。

まさか、麗奈の方を向くと…。

「ぎゃあああああ!!!!」

はっ

目が覚めた。

「大丈夫？来ないでって叫んでたよ。」

一体、いつまで続くのだろうか。この夢は…。
いや、夢なのか…。

永遠に続くのだろうか…。

天井と人形

ギイイ…、ギイイ…。

毎晩、12時ジャストに、天井から聞こえる奇妙な音…。

はじめの頃は、ネズミかなんかだろうとスルーしていたが、時間帯はいつも同じだから、怪しくなつて、今はその部屋では寝ていない。

時折、キャハ…、キャハ…。

のような声が聞こえるときもある。

おかしいと思い、親に相談したが、天井をのぞいても何も無い。ネズミもない。では、何なのだろう…。

私は石原琴莉。中2になつたばかり。

新しいクラスに、新しい担任。

楽しみで楽しみで、眠れない夜が続いたときに、

天井から音がすることに気づいた。

「琴莉、おはよう！」

「わあ、琴莉一緒だね！！」

新しい教室に入って、小学校から一緒の市川葉と、小西愛羅と、朝の挨拶を交わした。

「でもさあ、不吉だよね。」
「なんで？」

いきなり不吉といった葉に、私は驚いた。

「あゝ、2年5組はね。」

「だからなんでなの??」

「琴莉、忘れたの？ 2年5組って、去年のここのクラスの人がさ、自殺したんだよ！」

「ええ、そうだったかなあ？」

「それでさ、今琴莉の座ってる席もさ…。”ゴメン”ってほってるじゃん…。」

自殺した人のだよ。きっと。」

私の座っている机といすは、なんと、去年自殺した人が使っていた物らしい。

「ええ、大丈夫でしょ…。」

「いいや！わかんないよ！怨念がかかっているかもしれないぞあゝ…。」

「お、脅かさないでよ！」

私は、半信半疑ながらも、普通に過ごした。

「2年5組のみなさん、おはようございます。私は担任の山田紀子です。」

みなさんと会えたのも、何かの縁ですね。これから1年、よろしく
お願いしますね！」

何かの縁……。か。

今年は、クラスの雰囲気も良いようだし、まあ、縁でもおかしくはないか。

放課後、葉と愛羅と一緒に帰っていた。

そう、去年もずっとそうだったから、変じゃなかったけど。

家に帰り着いて、すぐあの部屋に行った。なんか嫌な予感がして……。

しかし、何の様子もないし、変な音はしない。

ほっとして、出ようとしたとき、

「いつちゃだめ……。」

「遊んでよ……。」

のような声がするのだ。

私は振り返った。その瞬間。

辺りは真っ暗になった。

「なによ、まだ4時でしょ……。」

「琴莉ちゃん……。いつもこの部屋で寝てたのに、最近寝てないんだもん……。」

「いつも私たちが遊んでくれてたのに……。」

「どうして天井に捨てちゃったの……?」

「遊んで……遊んでよお……。」

「遊んでくれるまで帰らせない!」

「遊んでくれるまで帰らせない!」

どうやら、天井に現れたようだ…。

私は、そつと天井を開ける。

私が目にしたのは…。

私が最近黙って天井に片づけた人形達だった。

そくだ…。お母さんに部屋を片づけろと行って、部屋に置いてあった人形を

天井に隠したのだった。

「人形…。嫌いになったの…??」

「私たちが嫌いになっちゃたの？」

「ちがうよ…。大好きだもん…。」

「そう、なら、また私たちを、あの部屋に置いてよ！」

「ここ、寒いの。」

「また琴莉ちゃんと遊びたいよ！」

そして、私は人形すべて部屋に戻した。

それから、何も音がしない。

人形もほほえんでいるようだった。

しかし、一つ疑問点がある。

なぜ、親とみたときは、見つからなかったのだろう…。

そして、自殺した人は、私になにかしてこないだろうか…。

変な歌と消える女の子

” 5時になったらカラスが鳴くからみんなで手をつないでかーえろ”

私は野尻葉月。私達の町では、この歌が有名になってきている。

夕方5時前になると、どこからか、この歌が聞こえるのだ。

私は近所の子供だろうと思っていたが、

どうやら、近所の子供も私と同じく、近所の誰かかと思っていたらしい。

今は4時52分…。もうすぐでこの歌が聞こえるはずだ。

今日は、友達と遊んでいた。ユーミンとメグ。

二人も、この歌が不思議でたまらないらしい。

「この歌さ、もしかして幽霊が歌ってんじゃない？」

「えー、ちよつとユーミン、やなこと言わないでよ。」

「だって、ねえ？」

もうすぐ5時…。

なつてしまった。

” 5時になったらカラスが鳴くからみんなで手をつないでかーえろ”

「あ。」

「きこえる…。」

「ねえ、この声、墓場から聞こえてこない？」

「え、んなことないよ。」

私達3人は、墓場のほうへ言った。
墓場からかもしれない…。

「5時になったら…。」

「あはは…。」

「お母さん。ごはんまだ??」

この声は…。

「ねえ、ユーミン、メグ…。この声、あの声じゃないの…。」
「たしかにね…。」

さらに近づいていく。

「お母さん…。今日はどの子?」

「そうね…。このギャル少女で良いんじゃない?」

「わーい！僕、ギャル好き！おいしくて柔らかいもん！」

なんだ、この会話は…。

「ちょっと、もう帰ろ…。なんかおかしいよ、会話的に。」

「さあ、坊や。ギャルの肉じゃがだよ。」

「ねえ、お母さん。さっきから女の子達がこっちを見ているよ。」

「あら、どんなこ?」

「ギャルの子と、キョートな子と、クールな子。」

「あら、お母さんクールな子のお肉大好きよ…。」

「じゃあ、捕まえてこようか?」

「そうね、さめないウチにね。」

「はい。」

こっちにくる！！私達は必死で逃げた。

「メグ！葉月！あの子早いよ！！」

「助けてー！！」

「死にたくない！！」

「あはは…。今日は3匹…。」

ぐさり……………。

「メグ、ユーミン…。バイバイ…。」

次の日

「ユーミンと葉月とメグがさ、行方不明だった。」

「え、私遺体見つかったって聞いたよ。」

「え、マジで？」

「マジマジ。なんかさ、墓場で白骨化してたって。」

「え、1日で白骨化する？」

「きつとさ…。そぎ落とされたんだよ！肉を！！」

「ぎゃあ、やめてよ!!」

「でもさ、わかんないよね…。あの歌が聞こえ始めたのは、うんある親子が行方不明になった日から。それから毎日、女の子がねらわれるでしょう? きつと、何か関係があるんだよ!」

「しかも、遺体は白骨化してから見つかる!」

「うん。もう、墓場には近づかないようにしよう。」

「それとさ、ギャルの美菜って、やっぱり白骨化してみつけたの?」

「うん。気をつけよう…。私達も油断できないよ。」

「そっだね…。」

きつと、次はあなたをねらいます……………。

おばあちゃんの幽霊(前書き)

私は綾部彩。

今日はおばあちゃんの命日で、

お墓参りに行くんだけど、

おばあちゃんの墓の近くでは事件が多発していて……？

おばあちゃんの幽霊

私のおばあちゃんの家のお墓の近くには…。墓地がある。1000年前から。今とは違って、塔のような建物の中にある。

私のおばあちゃんのお墓も、その塔の中にある。

だから、時々行くのだが、16歳になり、おばあちゃんが死んでから5年たった今でも、なれていない。

最近、私のおばあちゃんの家で事故が多発するようになった。原因はわからず、余所見か何かだろうと警察は推定している。

今日は、おばあちゃんの命日。いつものように、墓参りに行くのだが、
やっぱり怖い。怖い。

「彩、なにしてるの。行くわよ。」

「はい。」

お母さんに言われ、しびしび車に乗り、あの塔へ向かった。

「彩、ついたわよ。はやく降りなさい。」

ああ、ついてしまった。

早く行きたくないときに限って早くつくものだ。

「彩…。」

「なあに」

お母さんに呼ばれたと思って返事をしたが、お母さんに逆になあにと言われた。

「え、お母さんが呼んだんじゃないの？」

「私はなにも言っていないわよ。」

気のせいかと思って、そのまま、おばあちゃんのお墓の前に立った。

手を合わせ、おばあちゃんのことを思い出していた。

「さ、彩。帰ろうか。」

「うん。」

お墓参りを終わらせ、ほっとしていたのもつかの間。
また、だれかに呼ばれたのだ。

「彩…。」

「お母さん、呼んだ？」

「だから、私は何も言っていないわよ。」

「一体、誰だろう…。」

気のせいとか空耳にしても、なにか気持ち悪い。

「お母さん、私、先に車にいつてるね！」

と言って、私は走った。

「あ、こら彩！ここで走るんじゃないやありません！！」

私は、無我夢中で走った。

「彩…。こらこら、走るんじゃないよ…。」

「もうやめて！誰なの！？私を呼ぶのは！！」

「彩…。わしじゃ…。」

「わあ！！！」

私は転んでしまった。この声は…。

「おばあちゃん！！！」

「彩…。彩だね…。久しぶりだねえ。」

「久しぶりじゃないわよ！おばあちゃん、死んだんでしょ！じゃあ、幽霊？きやあ！」

「彩…。驚かせてごめんねえ。わしや、彩が心配でねえ。」

「何いってんのよ！私もう16だから平気よ！」

「そうかい…。彩…。大きくなったねえ…。」

「おばあちゃん…。」

そういって、おばあちゃんは消えた。

きっと、私のことが心配だから幽霊になって出てきたんだ……。ゴメン。

気づけば、私は病院のベッドの中にいた。

「あれ、ここは……。」

「彩……。気づいたのね。良かった。」

「お母さん……。ここは病院？」

「そうよ。彩、あんた急に走って行って、その場で転んでたでしょ。一瞬死んでいたのかと思ったわ。」

「ごめん。あ、それより、お母さん、おばあちゃんに出会ったのよ。」

「バカなこと言っんじゃないやありません。」

「本当なのに……。ぶー……。」

おいてけ姉ちゃん”市松人形

「おいてけ〜…。おいてけ〜…。」

「ちょっと、やめてよ美保！」

「え〜、いいじゃん！」

私は岡田美保。中3。

この年になっても、幽霊を信じてる。

「おいてけばあさんだよ〜。」

「やめてっつてばあ。」

友達の栗原知美は、幽霊を信じていないくせに、私の怖い話は怖いらしい。

「あ、そういえば、おいてけ〜で思い出した。」

「なにを？」

「おいてけ姉ちゃんだよ。知らない？」

「知るわけないじゃん。」

「知らないの〜？じゃあ、教えてあげる。」

あのね、先週の水曜日、遺体がバラバラの状態で見つかって、髪の毛が無くなっていたという話。」

「あ、それね。なら知ってるけど、おいてけ姉ちゃんとか関係あるの？」

「それがね…。おいてけ姉ちゃんが、髪の毛をおいてけ…。ってその人に言ったらしいんだけど、その人はもちろん否定。それで、殺されちゃったとか。」

「ひゃあ、怖い！やめて！」

「え、そんなに怖かった？」

知美はぶるぶる震えている。

あれ…？

知美は、ショートヘアだ。だが、髪の毛が短くなっている。

「知美、髪の毛切った？」

「え、切ってないけど。」

「あ、そう。」

じゃあ、なにかの気のせいかな。

そう思っていた。いれば良かった…。

放課後、今日は部活が休みなので知美と一緒に帰った。

好きな人のこと、今度遊ぼう、など、いつもとなんの変わりもない話をして帰ったが、知美に変化は無かった。

「やっぱり、見間違いだね。」

「え？」

「あ、何でもない。じゃ、また明日ね。」

「うん、バイバイ。」

知美と別れて、一人でとぼとぼ歩いていると、妙に違和感が背中を走る。

だれかに見られているかのようだ。

後ろを振り返るが、何も無い。

「あ、あはは……。最近寒くなってきたのかなあ……。」

ひとりごとをいって、心を落ち着かせた。

次の日、また怖い話をしていると、知美は、元気がなかった。

「知美……？」

「ねえ、美保……。」

「なに？」

「今日、遊ばない？」

「え、別に良いけど。」

「なんで、今、そんなことを言ってくるのだろう。」

「いつもなら、やめてとか怖いとしか言わないのに。」

「でも、まあせっかく誘われたので、しかもまた部活は休みだし、遊ぶことにした。」

「知美の家に招待されて、知美の家に行った。」

「いらっしやい…。美保。」

「知美は妙に元気がない。」

「おじやまします…。」

「いつもと違う雰囲気を知美に、私は違和感を覚えた。」

「私の部屋で待ってて。」

「知美の部屋に行き、座って待っていると、知美が来た。」

「美保、はい、ケーキ。」

「ありがとう。」

やはり、暖かみがない。いつもの知美じゃない。

「ねえ、美保。ちょっとトイレに行って来るね。」

「え、あ、うん。」

私は、怪しかったので、知美にばれないようについて行った。

ところが、知美は、トイレではなく、和室らしきトコに入っていた。

障子をそっと開けてのぞいて見ると、そこには…。

「あつ…。」

市松人形…。そして知美…。市松人形が、知美の髪の毛を引っ張る。

「ミイタアナア…。」

恐ろしい声。これも知美の声??そうなの??

市松人形が、ギロリとこっちを向く。

そして、おちよぼ口が、にたあつと、口が裂ける。

「お前だなあ…。」

市松人形が、こっちに向かってくる!!

「ぎゃああ…!」

私は自然に叫んでいた。

私の自慢の長い髪の毛をねらってくる！

「おいてけ〜…。おいてけ〜！！！」

はっ。おいてけ？もしかして…。おいてけ姉ちゃん！？

「ごめんなさい！まねして遊んでごめんなさい！ゆるしてえ！！」

「おいてけ〜！！！」

「いやあああ！」

気づいたときには、私の髪の毛は無かった。

そこに倒れてあった市松人形は、髪の毛がすごく伸びていた。

「え、ちょっと！美保！どうしたの、その頭！！！」

私は、すぐに病院に運ばれた。

原因は不明だという。

しかし、知美も元に戻った。

おいてけ姉ちゃんは、どうして髪の毛をほしがったのだろう…。

退院して、また知美の家に行くと、そこには…。髪の毛の短いあの市松

人形が…。

「ひいつつ!!！」

「どうしたの、美保。」

「…。なんでもない。」

市松人形は、またも私を睨む。

しかし、私をねらってくることはない。髪の毛がないから。

だから…。今度は知美か誰かが…。

1)の町の噂

「美咲、元気でね。」

「優子、今までアリガトウネ。手紙書くからね！」

今日は、引っ越しの日だ。

お父さんの急な転勤で、私は県外の全く知らない土地へと転校した。

眠ってしまったらしい。

着いたときは、夜中の2時頃だった。

「美咲、今起こそうと思ってたの。」

「お母さん……。着いたんだね。」

「そうよ、ここが新しい家よ。」

新しく住む家は、平屋だ。それに、前、誰かが住んでいたとは思えないくらい

綺麗だ。それが違和感を覚えさせられる。

今は真っ暗だ。私は、こんなに目が良かっただろうか。はつきりと見えるのだ。

「美咲、荷物を下ろすの手伝ってちょうだい。」

「ふわぁい……。」

眠たい目をこすりながら、重たい荷物を運ぶ。

「ふー、やっと終わった。」

荷物を下ろし終わって、とりあえず寝ようと思っていた。

「お母さん、寝ても良いよね？」

「ああ、良いわよ。お休み。」

朝、目が覚めて、辺りを見回すが、誰もいなかった。

「お母さん？お姉、お兄？お父さん？」

しーん。

「近所に挨拶でも行ったのかな？」

しかし、昼になっても、夕方になっても、夜になっても帰ってこない。

「…？何やってるんだろう？」

私は、気になって近所を探し回ったが、見つからない。

「どこいったの…？」

そこに、腰の曲がったお婆さんがいた。
話しかけてみよう。

「あの、お婆さん。この辺で、4人の家族を見ませんでしたか？」

「4人の家族とな。さあみとらんわ。」

「そうですか…。ありがとうございます。」

「あ、ちよいとお待ち。」

「あ、なんですか？」

私は、お婆さんに止められて、振り返った。

「あんたは確か、そこに越してきた…。横田さんとお嬢さんかい？」

「そうですね…。」

「やはりな。あんたらはこの町の噂をしらんだらうと思って

あとで行こうと思つとつたんじゃ。」

「噂？」

「そうじゃ。あのな、この町には昔、およねというそれは美しい女性がおつた。」

およねは、優しい女性でもあつた。男性受けが良い理由はそれにもある。

しかし…。それをねたんだ女性らが、およねを殺してしまったのじゃ。

それから…。およねを殺した者が次々と死んでいった。

理由はわかつとらんじゃ。しかしな、それは、およねの仕業という噂が立つての。

およねは、この町に住む若い者を殺してしまうと言つた。

そりゃもちろん、迷信じゃが、最近、またこの辺で事故や殺人事件が多数発生しとる。じゃから、気をつけて欲しいのじゃ。」

「そうですね。気をつけます。」

迷信なら、怖くも何ともない。

でも…。事件とかが最近増えてるって…。

気をつけないと。

家に帰つたときには、みんな帰つていた。

「あ、美咲！どこいったの？」

「お、お母さんたちこそどこいったのよ！」

「朝、買い物に行くって行ったじゃない。美咲は寝てたから、起こさない方が良くも思っ。準備も昨日のうちに終わっちゃったし。」

「そっか、あ。お母さん、この町の噂って知ってる？」

私は、お婆さんに聞いた噂をお母さんに話した。

「まあ、そんな噂が。気をつけなきゃね。」

とりあえず、お母さん達は帰ってきたし、良かった。

次の日、私は新しい学校へ向かった。

「県の市から来ました。横田美咲といます。宜しくお願
いします。」

「横田さんは、これから5年1組の仲間です。みなさん、仲良くね。」

私は、5年1組になった。

友達もできた。

ところが、あんなことになるなんて…。

「美咲ちゃん、バイバイ。」

「バイバイ、花江ちゃん。」

友達とわかれて、一人で帰っていると、後ろから声がした。

「ああ、どうしよう…。どうしよう。」

「あの、どうかしましたか？」

「ああ、どうしよう…。どうしよう。」

「あのお。」

「どうしよう…。」

さっきからどうしようとしか言わない女の人は、私の家へと向かっている。

「え、ちょっと!」

「うるさいのだ! だまれ!」

「え、すみません…。」

女の人は、ものすごく怖い顔をして、私を睨んだ。

今、家には誰もいない。お姉とお兄は部活、お父さんとお母さんは仕事。

困った…。女の人は家の中に入っていった。

「やばいよ…。」

「どうした、美咲。」

「あ、お兄。部活は？」

「今日は先生が出張で休みなんだ。それより、何で家ん中に入んないんだ？」

「今ね、変な女の人が家に勝手に入っていったの…。」

「なんだって？」

お兄は、おそろおそろ家に入る。

しかし、中には誰もいない。

「誰もいねえじゃん。」

「あれえ？今確かに入ったのに…。」

「夢でも見たんだろ。」

「…そつか。そうだよね。」

なにかの見間違い…。今はそう思うしかなかった。

ところが次の日も、その女の人が出たのだ。

また家へ入ろうとする。

私は、それを止めた。

「何故私のじゃまをする…！」

「だって、そこは私の家なんです！」

「ここは私の家だ！」

「何言ってるんですか！とりあえず出てください！」

「はなせ！私はこの町の美人、およねだ！」

「えっ…。」

およねって…。おばあさんがいつてたあの…？

そのとき、私はおよねに突き飛ばされた。

「きゃあー！」

道路に倒れてしまった私は、車が来ていることに気づかなかった。

きぎーっ…！

「わ、きゃあああ!」

車は、私にぶつかる寸前で止まった。

「ちょっと!美咲!なにしてるのよ!」

「お母さん…。」

「とりあえず、ドキなさい。」

「う、うん。」

およねは、にたりとこちらをむく。

「私を殺そうとしたのね!?許さない!」

私は、およねを持ち上げた。

驚いた。およねは、風船のように軽いのだ。

「なにをする!はなせ!」

そして、私はおよねをお母さんのバックしている車の近くにおいた。

「きゃあああ!」

およねは、叫び声をあげて、砂のように消えていった。

「あれ、今なんか言った?美咲。」

「ううん。何も言ってない。」

「そう、気のせいね。」

お母さんは、気づいていない。

およねはハイになり、風で飛ばされていった。

「…およねさん、あなたは悪くないの。でもね、私は、私を殺そうとしたことを」

許せないの。ごめんなさい。」

どこかで、およねの「」どろじよじ「が聞こえてくるような気がした。

口裂け女

「やめてえええ！！来ないでえええ！！」

「まてえええ！！」

私は、今、口裂け女に追いかけられている。
耳まで裂けた口……。思い出だけで恐ろしい。

私はおちよぼ口だから、それが羨ましいのだと言った。

「おのれえええ！！またんかああ！！」

「誰かあ！！たすけてえええ！！」

口裂け女は、もう少しで私に追いつく。

口裂け女は……。カマを持っている。

切られたら、即死だ。

「こむすめえええ！！」

そのとき、たまたま車が通りかかった。

その車に飛びつく。今はそれしかできなかった。

車をどンドン！とたたき、乗せてもらった。

「こむすめえええ！！」

「すみません！乗せてください！」

ガラスを割って、中に入り込む。

「え、何ですかいきなり！」

「お願いします、かくまってください！」

「ガラス代、弁償してくださいよ！」

振り返った女の人は、口が耳まで裂けていた。

「い、いやあああ！！！」

「ひっひっひ…。こむすめええ…。大人しくつかまれえええ…。」

「きゃあああ！！！」

車から飛び出して、逃げる。

「私が何をしたって言うの？神様…。」

「こむすめえええ…。」

「ガラス代…。」

ああ…。もう少しで私の家…。

それで、私は気が抜けたのだろう。

転んでしまった。

「こむすめええ。やっとなつかまえたぞおおお…。」

髪の毛を引っ張られる。

「いい、痛い！はなして！！」

「お前も今日からは口裂け女だあ…。」

そういつて、口裂け女は大きなカマで、私の口を裂いた。

声も出ない。ああ…。私は、死んでしまうのだろうか…？

違った！！今、私は、大きなカマを持って、どこかの女性を追いかけている。

手には、カマを持って…。

「こ…。こむすめえ…。」

今、口裂け女となった私の目には、涙がきらりと光った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6014g/>

今夜は眠れない...

2010年10月28日06時08分発行